

4章 課題文読解・要約

1 課題文読解型課題への対応

① 課題文の種類

- (1) 論理的文章…論文(評論、研究論文など)、論説文(新聞社説など)、説明文
- (2) 文学的文章…エッセイ、小説、韻文(詩、短歌、俳句など韻律(リズム)を持つ文)
- (3) 実用的文章…通知・届、報告書など

② 課題文の役割

(1) 発想

以下の事項全てに関連する。発想のヒントとすべきケースもある。

(2) 論点設定

課題文の論点、つまり課題文中で取り上げられている中心問題に重ねて、自論の論点を設定するというケースが多い。最も一般的な課題文の活かし方である。

(3) 論述の視角(立場)設定

これについては、相異なる立場からの意見・見解を述べた複数の課題文が与えられている場合がほとんどだ。それらを参考に、テーマに対しての自分の立場(賛同・反対・中立・止揚等)を定めて論じていく。

(4) テーマに関する知識、理解の深化

特定のテーマについて、その背景や現状が説明されているような課題文が与えられている場合。ある程度の専門的知識を必要とする分野(バイオや医療・農業問題・経済問題等)に關しての課題に多い。

(5) 題材選択

例えば、前項(4)を元に適切な題材を選ぶわけだが、課題文そのままの材料では、独自性に関して低い評価となるので注意が必要だ。

(6) 分析・考察

課題文中の分析の仕方、論考の進め方を参考にし、自論の考察に生かしていく。この場合も(5)同様、課題文の焼き直しに終わらぬよう注意する。

(7) 主張・提言

(5)・(6)と同様の注意が不可欠なのは言うまでもない。課題文はあくまでも参考とすべき材料であり、自分の主張を打ち出すことが大切だ。ただし、設問によっては、課題文中の意見を書かせるケースもあるので、設問指示に従っての課題文の扱い方を心がけよう。

2 課題文としてのエッセイ

エッセイとは「自由な形式で書かれた個性的色彩の濃い散文」であり「経験・見聞・感想などを気の向くままに記した文章」とでも言えようか。その特徴は形式においても内容においても自由であるということだが、思いのままに書き綴っていった文章だけに、論理の飛躍や視点の移動などが頻繁に起こってくる。これが読解の困難さの要因となって読み手を悩ますわけだ。よってこうした文章を読み解くもっとも効果的な方法は、(ちよつと乱暴な言い方だが)自分が筆者になってしまいうことである。

■読み方のポイント

(1) 筆者の「特徴」あるいは「ものの見方」をつかむ。

筆者の「特徴」とは他の人々から筆者を区別する何か、他の人にはない筆者ならではの何か、ということになる。また「人生観」や「世界観」などの「ものの見方」には、その人特有のものがある。エッセイ(文章)の中で視点がくるくる変わったたり、異なる話題にとんだりしても、その文章で筆者の「特徴」や「ものの見方」が変わることはない。

(2) 筆者の「特徴」や「ものの見方」を理解し、筆者の立場に立って文章（エッセイ）を繰り返し読む。

「特徴」や「ものの見方」を理解していくことによって、その人がどんな人間であり、どんなことを考え、そうなのかをある程度まで想像することができよう。そうした理解と想像に基づき、筆者の立場に身を置いて文章を読み進んでいけば、あなたを悩ました視点の移動や論理の飛躍、特有の言い回し（キーワード）の意味も自ずと見えてくる。そしてすんなりと文章を読み解くことができる、というわけだ（もちろん練習を積む必要はある）。

(3) 筆者の価値観や基本的立場を理解した上で、それとは異なる立場に立って筆者の主張や指摘を吟味しながら読む。

エッセイはまた「思いのままに書き綴っていく」という特徴を持つ。緻密な構想や論理的な整合性、という点では弱いわけだし、また主観的な把握に傾きがちという傾向も見られる。こうした特徴は、あるテーマについて考えていくとき、ともすると一面的あるいは偏った捉え方を生じさせがちとなる。課題によっては、こうした問題点の発見能力を探る狙いもあるので、筆者に対して批判的な立場で再読するという読み方も必要になってくる。

■ 論述への活かし方のポイント

(1) 基本的には、「課題文の役割」に沿う。更に、筆者の人柄や人間性がよく表れるというエッセイの特徴から、筆者の「ものの見方」に着目し、自分自身の「ものの見方」を対置させて、要求テーマに対する自分の立場を決定し、論じていくという方法がある。

(2) エッセイの論理の弱さ、分析の甘さなどの問題点に着目し、それを論点設定や論考に活かすこともできる。

(3) 自由奔放さを特徴に持つエッセイでは、筆者の思考は一か所にとどまらない。こうしたエッセイを課題文に用いた小論文では、要求の幅が広く、自分なりのテーマ設定が必要な場合が多い。「課題文の特徴を活かしつつも、筆者の奔放さや強烈な個性に振り回されず、課題文から独自のテーマを選んで書く」ということ

がポイントになるが、このためには、冷静な観察眼を鍛えるときともに、日頃から材料を蓄積し、さまざまな分野についての基礎知識を整理しておくという地道な努力も必要である。

《エッセイ課題文の読み方》

- (1) 筆者の「特徴」あるいは「ものの見方」をつかむ。
- (2) 筆者の「特徴」や「ものの見方」を理解し、筆者の立場に立って文章（エッセイ）を繰り返し読む。

《エッセイ課題文の論述への活かし方》

- (1) 筆者の「ものの見方」に自分の「ものの見方」を対置させ、要求テーマに対する自分の立場を決定する。
- (2) エッセイの論述としての弱さをつく。
- (3) 幅広い内容のエッセイの場合、自分なりに課題文からテーマ設定をする。

3 事実中心の課題文

事実中心の課題文とは、新聞のコラム記事など事件や出来事の紹介が大半を占めているような文章である。エッセイとの相違点は、筆者が前面には出てこないことだが、文章の材料（事実）の選択やその扱い方から、そこで扱われている問題（テーマ）に対しての筆者の基本的な立場や考え方は読みとれる。

■読み方のポイント

- (1) 扱われているテーマあるいは問題を押さえる。
- (2) (1)に対しての筆者の立場あるいは考え方とその論拠をつかむ。
言うまでもなく、論拠は事例（事実の紹介）という形で表されている。現象レベルで示されている故に、ともすると筆者の考え方の把握が浅薄になりがちなので、要注意。

■論述への活かし方

- (3) (1)についての自分の立場あるいは考えを定める。
このとき(2)でつかんだ筆者の立場等を参考にするとよい。
- (4) (3)で定めた自分の考えを読み手に伝えるに効果的な題材を探す。
筆者と同じ立場に立つ場合には、課題文中の材料以外のものを探そう。論点を引き出すための材料については、自分の体験や見聞から独自の事例を選びたい。また論拠として用いる材料については、そこから発展的見解が引き出せるようなものを選ぶと、論の展開が楽になる。一方、筆者に批判的な立場に立つときは、十分説得力のある材料を選ぶことが不可欠だ。
- (5) 課題文に引きずられ具体例中心の文章にならないように注意する。
小論文なのだから「分析・考察」をきちんと行なおう。それが論の出来を左右することになる。

4 論理的文章

論理的文章の特徴は、そこで取り上げられているテーマが一定であること、またテーマについて筆者なりの意見や見解を論理的に述べていることである。論理的文章は、原則として、「論点」「主張」「分析・考察（主張を導き出すためのプロセスあるいは証明の過程）」からなるので、これらのポイントを押さえることが読解の基本である。

■読み方のポイント

- (1) 設問文を読み、何が問われているのか、どんな条件が課されているのかを確認する。

(a) 論点把握

筆者はテーマに対し、どんな切り込み方をしているのか、どんな問題設定をして論じようとしているのかをつかむ。

※論点は一般に疑問文で表されるが、明示されていない場合もある。論理的文章での論点は、次の三つ

に分けられるので、課題文に応じて適切に判断しよう。

・疑問文の形で明示されている場合

「なぜ……なのか」「……の原因は何なのか」「……の背景には何があるのか」等

・疑問文ではないが疑問の意を持つ文で表されている場合

「問題は……である」「二点ほど疑問がある。一つは……」等

・明示されていない場合

文脈から推定する。あるいは設問文中に論点が表示されている場合もある。

(b) 主張を把握

取り上げられているテーマあるいは問題に対する筆者の考えをつかむ。その際、筆者の基本的価値観を理解していれば、より確かな把握が可能となる。

(c) 展開（論の流れ）の把握

筆者が自分の主張をどのように導き出しているか、どんな方法や材料を用いて証明しているかを理解する。

(d) 筆者の価値観あるいは基本的立場：「エッセイの読み方」に同じ。

5 要約について

課題文読解型小論文では、課題文を「読む」作業から筆者の主張を正確に把握し、それを踏まえ、「自分の考え」を論述することが主なる要求となる。そのためか、最近、〈要約＋論述〉型の出題が増えている。

■ 1 要約とは……

小論文における要約とは、「簡潔にまとめること」。さらに詳しく言うならば、議論・考察の対象としての「問題」に対し、筆者がどのような論理を用いて自分の考えを文章で述べているのかを正しく把握し、それを指定字数内で、簡潔・明快な文でまとめ上げる作業、ということになる。

■2 完成度の高い要約文のポイント……「論述」問題とのつながり・関連性を意識する

小論文において「要約」が要求される目的は、まず、課題文筆者が文中で取り上げている「問題」とそれに対して導き出した「答え」、そしてその「問題」↓「答え」のプロセス（筆者の「考え」の論理的筋道）を整理・理解することにある。そしてそれが正確に行えるかが、次に控えているあなた自身の「考え」の論述（「論述」問題）の出来具合に深く関わる。つまり、小論文の要約は、単なる読解力チェック機能のみを果たしているのではない。課題文筆者の考え・主張を踏まえ、それと対話・議論するような形で考察・思考が土台となった「論述」が求められている意味を含む。

それ故、単に、課題文を短くした「文章の縮図」的な要約文ではなく、筆者がどんな問題を取り上げているか、その問題に対してどのような証明プロセスで答えを導き出しているのか、その答えとはどういうものか、等を明確に示すことができているような要約文を作りたい。要するに、課題文の中の「論理構造」が、その要約文を見ればすぐわかるような要約が望ましい。

*注) 一口に「要約」と言っても、「課題文を読み、その内容を○〇字以内に要約しなさい」というような、「大意要約」もあれば、「□□について、筆者が言及していることのみをまとめなさい」という部分要約もある。各課題の設問文で、どのような要約が求められているのか、必ず要求を確認すること。

■3 要約の手順・要約のポイント

- ① 課題文の論理構造を把握する……意味段落を把握する。
- ② 各意味段落の内容、そしてその関連性を理解する。
- ③ ①・②を踏まえ、要約すべきポイントを明確化する（どの意味段落にそれらが存在するか）。

【要約すべきポイント】

A 筆者が提起している問題（論点）……議論すべき問題として取り上げている問題。

課題文の初めの方の部分にあることが多い。

B Aに対する筆者の主張（答え）

C A↓Bを導く論拠

D 筆者の基本的立場・価値観・その人独特な考え方（を決定づける動かし得ない信条など）

E キーワード・重要概念……その課題文の内容や文脈において、欠かすことのできない重要概念や、筆者

独自の考えや物言いを表すキーワードは、そのまま活用する（勝手に変えない）。

■4 要約ポイントを要約文としてまとめる

【注意すべき点】

① 取り組む基本方針Ⅱ「何を捨て、何を残すか」（残す部分Ⅱ前述の「要約すべきポイント」）

↓「捨ててよい部分」Ⅱ課題文の種類・内容・指定字数により一概には断定できないが、課題文中の本筋（論点主張をつなぐ論理的筋道）とは無関係な話題、あるいは具体例ということになる。

② 課題文の抜き書きを繋げただけの要約文にしない。

↓要約すべきポイントを、文章の流れ（論理構造）に沿ってまとめる。できるだけ各ポイントを、読む側が自然に読み理解できるように、自分なりに言葉を吟味しまとめる。

③ 重複は避ける……同じ言葉、同じ意味のセンテンス・フレーズはできるだけ重複させない工夫をする。

④ 自分の考え・価値観は混ぜない。

↓「要約」とは、課題文筆者の考え・論理の正確な把握を目的とする。それ故、キーワードの大幅な書き換えや、センテンス・フレーズのニュアンスを大きく歪めた書き換え等は避ける。

⑤ 論理の飛躍が見られるようなまとめ方はしない。

5章 資料への対応

1 ユニーク資料への対応

地図や写真、絵などの資料が提示される出題がある。基本的には、設問要求に即して資料が表している意味を読み取り、出題側の意図を考えながら、論の方向を定めていく、という作業を行うとよい。ただ絵や写真などは、それらから受けた印象等が大切な要素なので、それらの資料のどこに、なぜ、心を動かされたのかをきつちりと見極め、そこから思考を発展させていく、という作業がポイントとなる。いずれの場合にも、資料そのものについての解釈や解説、鑑賞、感想文だけに終わらぬよう注意しよう。

また、厳密な意味では小論文とは言えないが、討論や手紙、あるいはシナリオ形式での記述が求められる場合もある。いずれの場合も要求に沿っての明確な主題設定が不可欠だ。

2 資料（データ）小論文への対応

グラフや表は、実験や観察、あるいは調査の結果をデータ化し、示したものである。データ分析型の課題が出題される意図は、与えられた資料の意味を読み取り、その意味についての意見を述べたり、あるいは与えられたテーマを考えていく上での材料に用いたり、自分の見解の論拠として用いることができるかを見ることにある。つまり、データを読み取る理解力、さらに、データを自分の言葉で再構築していく能力を出題者側はみたいのである。

(1) 読み取り

(a) 着眼点

・グラフの場合

A タテ軸・ヨコ軸が表しているもの、及び各々の単位を確認する。

B 最高値と最低値、あるいは突出している数値に着目する。

C グラフの勾配の変化に注意する。(折線グラフの場合)

・表の場合

基本的には「グラフの場合」と同様だが、さらに(細かな数値にこだわりすぎず、全体の傾向をつかむ)つもりで読む。

(b) ポイント

A 背景や原因を推測する——数値から現実を読む——

数値の差異や変化の意味を考える、ということである。このためには与えられたテーマについてのあ
る程度の知識が必要となってくる。資料小論文の内容は、主に、社会科学分野では、「高齢化」「国際
化」「産業構造」等であり、自然科学分野では、「環境問題」等である。また、人文科学分野でも教育学
部等では、「教育関連問題」等が出題されることが多い。内容的に若干の差異は見受けられるものの、
どの学部でも共通して出題されるもの(例えば「高齢化」「環境問題」「医療関連問題」等)について
は、基礎知識の整理が不可欠だ。

B 「有意差」をつかむ

「有意差」とは「統計で、いくつかの変量の相関関係において、偶然とはいえない差」のことである。
つまり、どのくらいの差であれば「差がある」(意味をもつ)のか、ということであり、これを判断し
得る眼を持つことが大切である。このためには日頃から新聞や雑誌等に掲載される各種の統計データに
ついて、その解説部分とあわせて読み抜く訓練をつんでおくことよ。

C 複数の資料が与えられている場合はそれらすべてを有効に関連つけて読み取る。

(2) 論述への活かし方

データ資料についてもその役割は文章資料の場合と基本的には同じと考えてよい。ただし、観察や調査結果の数値化には、限界や問題もあるので、注意すべき点は押さえておこう。

(a) 資料の役割

- A 論点設定のヒントを得る。
 - B 分析・考察の参考とする。
 - C テーマを考えていく際の知識や材料を得る。
 - D 問題解決の方向や、手だてを探る際のヒントを得る。
 - E 主張や見解の裏付けとして用いる。
- A～Eのうち、どんなふうを活用していくかの判断は設問文による。つまり設問要求と条件を正確につかむことで、資料の論への活かし方は定まってくるのだ。よって設問文の熟読は必須条件である。

(b) データ資料の限界と問題点

本質的にデータとは、現象を「測定」した結果やあるいは調査結果を「統計」という方法により数値化して表したものである。ゆえにその対象（表しているもの）は「数値化」し得るものに限られる。換言するならば、統計数値が表しているのはごく一部であり、かつ量的部分だけであるということだ。この点を十分にとらえておこう。数値を絶対視したり、逆に、数値が示す範囲だけで問題への判断を下すのは、危険なのだ。

3 実験観察データ資料の読解について

理系や人間科学・総合科学系で出題されることの多い実験・観察データについては、これまで説明してきたような文系・社会系のデータ資料とは少し違う観点に立つての読み取り作業が必要となる。以下にそのポイントを

示しておくので、課題に取り組み際の参考としよう。

↓まずは設問文をきっちり読み、設問要求・条件（特にデータ読解の目的）をチェックする。その上で、与えられているデータの種類や内容を押さえ、以下をふまえて、データを注意深く読んでいく。

(1) 実験データ

・仮説の検証・証明に用いる場合が多い

↓証明すべき仮説が与えられている場合には、その仮説を要素分けし、各々の要素を実験データと突き合わせ、データからわかること（証明できること）、わからないこと（与えられているデータのみからでは証明できないこと）をチェック・整理する。

(2) 観察・調査データ

・仮説の検証に用いる場合

↓実験データの場合と扱い方は同じ。但し、観察や調査においては、実験の場合に比べ誤差が生じる確率が高いので、誤差をふまえていく必要がある。

・仮説を立てる材料（根拠）として用いる場合

↓データから読み取れることを整理し、科学的真理として立証されている諸知識や法則などをふまえて、仮説を立てていく。

(3) 複数のデータが与えられている場合

・すべてのデータを活用する（有機的に組み合わせる読む）が、読解の基本は(1)・(2)の場合と同じ。

・但し、各データ間に明らかな矛盾がある場合には、その矛盾の意味するところを読み解く（検証のためのデータの場合は仮説の正しさをチェックするポイントとして活用する）作業が論述作成の鍵となってくるケースが多い。ゆえに、細部にわたる厳密且つ丁寧な読みを心がける必要がある。

21世紀を迎え、教育や学校をめぐる問いは新たな状況を迎えている。従来の国公立／私立の教育機関以外にも、最近ではフリースクールや^{*}チャータースクールといった新たな教育機関も登場し、「学校」の定義は大きく広がると同時に、子供の成長にとって「学校」の果たす役割についての再考も進んでいる。

そこで、次のテーマに沿って、四〇〇字程度の小論文を書きなさい。

テーマ

「学校は必要か？」

*フリースクール⇨地方自治体が作る学校ではなく、一般市民が自由に設立・運営できる学校のこと。公的な援助は受けていない。

*チャータースクール⇨フリースクールと同じく誰でも設立・運営ができる。申請に応じて地方自治体から助成金を受け取ることができるが、定期的に監査が入り、ある一定期間に学力目標が達成されない場合は援助が取り消される。

一九七〇年代に書かれた次の文章を読んで、特定の社会問題に焦点を合わせながら、あるいはあなた自身の経験にもとつきながら、自らの考えを自由に述べなさい。(一〇〇〇字以内)

現在日本の社会状況の多くの混乱は、筆者の見解によれば、父性的な倫理観と母性的な倫理観の相克のなかで、一般の人々がそのいずれに準拠してよいか判断が下せぬこと、また、混乱の原因を他に求めるために問題の本質が見失われることによるところが大きいと考えられる。このため、現在の日本は「長」と名のつくものの受難の時代であるとさえ言うことができる。つまり長たるものが自信をもって準拠すべき枠組をもたぬために「下からのツキアゲ」に対して対処する方法が解らず、困惑してしまうのである。

母性原理に基づく倫理観は、母の膝という場の中に存在する子供たちの絶対的平等に価値をおくものである。それは換言すれば、与えられた「場」の平衡状態の維持に最も高い倫理性を与えるものである。これを「場の倫理」とでも名づけるならば、父性原理に基づくものは「個の倫理」と呼ぶべきであろう。それは、個人の欲求の充足、個人の成長に高い価値を与えるものである。

たとえば交通事故の場合として考えてみたい。ここで、加害者が自分の非を認め、見舞にゆくと、二人の間に「場」が形成され、被害者としてはその場の平衡状態をあまりにも危くするような補償金など要求できなくなる。ここで金を要求すると、加害者の方が「あれほど非を認めてあやまっているのに、金まで要求しやがる」と怒るときさえある。この感情はわれわれ日本人としては納得できるが、西洋人には絶対了解できない。非を認めたかぎり、それに相応する罰金を払う責任を加害者は負わねばならないし、被害者は正当な権利を主張できる。ところが、場

の倫理では、責任が全体にかかってくるので、被害者もその責任の一端を担うことが必要となるのである。日本人の無責任性がよく問題とされるが、それは個人の責任と場の責任が混同されたり、すりかえられたりするところから生じるものと思われる。

ところで、事故の場合、加害者が言い逃れをしたりすると、これは被害者と同一の「場」にいないものと判断し、徹底的に責任の追及ができることになっている。つまり、わが国においては、場に属するか否かがすべてについて決定的な要因となるのである。場の中に「いれてもらっている」かぎり、善悪の判断を越えてまで救済の手が差しのべられるが、場の外にいるものは「赤の他人」であり、それに対しては何をしても構わないのである。

ここで善悪の判断を越えてという表現を用いてしまったが、実のところ、場の倫理の根本は、場に属するか否かが倫理的判断の基礎になっているのだから、その上、ここで善悪の判断などといっても、それは判断基準が異なるのだから論外である。

場のなかにおいては、すべての区別があいまいにされ、すべて一様の灰色になるのであるが、場の内と外とは白と黒のはっきりとした対立を示す。日本人の心性を論じる際に、そのあいまいさに特徴を見出す人と、逆に極端から極端に走る傾向を指摘する人があって、矛盾した感じを与えるが、これは上述のような観点によるとよく理解されるのではないだろうか。

場の内外の対比は余りにも判然としており、そこに敵対感情が動く[、]絶対的な対立となり、少しの妥協も悪と見なされる。ところが、場の内においては、妥協以前の一体感が成立しており、言語化し難い感情的結合によって、すべてのことがあいまいに一樣になってくるのである。

交通事故の例をあげたが、現在のわが国では、さまざまな局面でふたつの倫理観がいりまじり、いろいろな混乱をまき起こしていると言えないだろうか。このような混乱を助長するもうひとつの要因として、次のようなことが考えられる。場の平衡状態を保つ方策として、場の中の成員に完全な順序づけを行うことが考えられる。つまり、場全体としての意志決定が行われるとき、個々の成員がその欲求を述べた^と場の平衡が保てぬので、順序の上のものから発言することによって、それを避けようとするのである。

ここで大切なことは、この順序の確立は、あくまで場の平衡状態の維持の原則から生じたもので、個人の権力や

能力によって生じたものではないということである。このような特殊な状態を社会構造としてみると、「タテ社会」の人間関係となることは、中根千枝氏が既に見事に解明している。これについては何らつけ加えることはないが、時に学生たちと話合っていると、「タテ社会」という用語を彼らがしばしば誤って使用していることに気づく。つまり、彼らは「タテ社会」という用語を、権力による上からの支配構造のような意味で用いているのである。これはまったく誤解である。

タテ社会においては、下位のものは上位のもの意見に従わねばならない。しかも、それは下位の成員の個人的欲求や、合理的判断をおさえる形でなされるので、下位のものはそれを権力者による抑圧と取りがちである。ところが、上位のものは場全体の平衡状態の維持という責任上、そのような決定を下していることが多く、彼自身でさえ自分の欲求を抑えねばならぬことが多いのである。

このためまことに奇妙なことであるが、日本では全員が被害者意識に苦しむことになる。下位のものは上位のもの権力による被害を嘆き、上位のものは、下位の若者達の自己中心性を嘆き、共に被害者意識を強くするが、実のところは、日本ではすべてのものが場の力の被害者なのである。この非個性的な場が加害者であることに気がつかず、お互いが誰かを加害者に見たてようと押しつけ合いを演じているのが現状であるといえよう。

場の構造を権力構造としてとらえた人は、それに反逆するために、その集団を脱け出して新しい集団をつくる。彼らの主観に従えば、それは反権力、あるいは自由を求める集団である。ところが既述のような認識に立っていないため、彼らの集団もまた日本的な場をつくることになる。そして、既存の集団に対抗する必要上、その集団の凝集性を高めねばならなくなるので、その「場」の圧力は既存の集団より強力にならざるを得ない。このため「革新」を目指す集団の集団構造が極めて保守的な日本的構造をもたざるを得なくなったり、大企業のタテ社会を批判して飛び出した人が、ワンマン経営の小会社という強力なタテ社会を作りあげたりする矛盾が生じてくるのである。あるいは若者の要求にしても、絶対的平等観という母性原理をもとにして、個の権利を主張するという父性原理を混入してくるので、なかなか始末に負えなくなるのである。場の倫理によるときは、場にいられてもらうために、おまかせする態度を必要とするし、個の倫理に従うときは個人の責任とか契約を守るとかの態度を身につけていなければならぬ。ところが、ふたつの倫理観の間を縫うようなあり方には、まったく対処の方法が考えられないの

である。

場と個の倫理の問題は論じてゆけば際限のないもので、既に日本人論として多くの人が述べてきた点とも重複するので、この辺にとどめておくが、ひとつだけ現代の日本の混乱を如実に示しているエピソードをあげておきたい。それは青少年の指導を行っている人にお聞きしたことであるが、シンナーの吸引をしていた少年達に、その体験を聞いてみると、彼らは一様に観音さまの幻覚を見、その幻覚のなかでの、何とも言えぬ仲間としての一体感に陶酔していたという。つまり、社会から禁じられているシンナー遊びをする点においては、反社会的、あるいは反体制的とも言えようが、求めている体験の本質は母性への回帰であり、わが国の文化・社会を古くから支えている原理そのものである。

これに類することは処々に見られ、これらの反体制の試みが簡単に挫折する一因ともなっている。このようなことが生じるのは、結局は日本人がなかなか母性原理から脱け出せず、父性原理に基づく自我を確立し得ていないためと考えられる。

(出典) 河合隼雄『母性社会日本の病理』(中央公論社、一九七六年)

次の文章を読み、問に答えなさい。

電車の中でも大学のキャンパスでも、携帯電話（以後、「携帯」と表記）でメールをやり取りしている若者が目立つ。それどころか今、会話を交わしている目の前の人が一瞬、手元の携帯に視線を落としてメールを読んでいることもある。かく言う私も、大学での講義中や大きな会場での講演中にポケットに入っていた携帯にメールが来て、そっと取り出して読んでしまった経験がある。もちろん、講義や講演には支障は来さない範囲でなのだが。

携帯だけにかぎらず、ここに来て^て掌の中に隠れてしまうような小さな情報端末が次々、発売されて人気を呼んでいる。これらを駆使すれば、まわりの人に気づかれたり迷惑をかけたりしないまま、膝^{ひざ}の上やアタッシュケースの中でいくつもの仕事を同時にこなしたり、たくさんの人と一度にコミュニケーションしたりすることも可能なのだ。

しかし、おそらく多くの人は、これを良い傾向とは感じないだろう。私自身でさえ、楽しく話していた相手が携帯などで同時に違う相手ともコミュニケーションしていたとわかった瞬間は、漠然と嫌な気持ちになることがある。その原因は何なのだろう。

ひとむかし前なら、これは「不謹慎」のひとつで理屈抜きで否定されたことかもしれない。私たちは、小学校時代から繰り返し「気をそらすことなく、目の前のものごとくに全力で取り組むように」と教えられてきた。雑念を払って精神集中。これこそが、何をする場合においても基本になるのだ……。日本人は昔からこの《精神論的な教

え》を信じて教育をし、仕事をし続けてきた。情報端末の普及は、この価値観が否定されることを意味する。ここで要求されるのは一点に集中し続ける持久力ではなく、いろいろな刺激を敏感に受け取り、注意をスイッチングする《運動神経》なのである。

どうしてたくさんの人と同時にメールで対話してはダメなのか、という問いへの答えを、きちんと説明するのは実はとてもむずかしい。電話のように大きな声が出るわけでもないし、メールを読むのは一瞬なので、現在の作業への影響もあまりないとしたら、否定の根拠はあまりない。残るのは「目の前の相手に失礼だから」といった《精神論的な教え》だけであるが、今やその説得力も乏しくなりつつある。だとしたら、「携帯で授業中にメールだなんて、許せない」という嫌悪感や違和感の根拠はどこにあるのか。

もしかしたらその最大のもは、私たちが長い間、信じ続けてきた《精神論的な教え》がガラガラと崩れていくのを見たくない、という不安や寂しさの感情なのではないだろうか。たとえば私自身の嫌悪感を分析してみると、その奥にあるのは「目の前にいる人は私だけと話してほしい」という非常に未熟な独占欲や嫉妬しよとの感情であるような気がする。どうも、それをうまく隠すために、「社会人だから携帯は切っておくべきだ」などともっともらしい理屈をつけているだけのようなのだ。

そう考えると、私たちは大事な決断の時期を迎えているとも言える。つまり、精神集中といった従来の価値観をここで放棄して、携帯やモバイルパソコンで同時にたくさんさんの作業や対話をこなす生き方を受け入れるか、それともやはりそれは認めないという態度を貫くか。IT革命の推進と従来の意味の「心の教育」は、どうやら並立しないようである。

(香山リカ「読売新聞夕刊」二〇〇〇年一月一七日掲載)

20

25

30

問1 文章の要旨を二〇〇字程度で述べなさい。

問2 情報技術の進歩とそれにもなう人間関係をめぐる価値観の変化について、あなた自身の考えを八〇〇字程度で述べなさい。

付録 論述の基本ルール

① 原稿用紙の使い方

- (1) 書き出し、段落冒頭（改行した場合）は、一マス空ける。カギカッコ（ ）で始める場合も、最初の一マス目は空け、二マス目にカギカッコ（ ）を書く。
- (2) 句点（。）、読点（、）、カッコ類等の記号はすべて一字とみなし、それぞれに一マスを用いる。
- (3) 句点と読点が行頭には置かない。（行頭にくる場合には、前行末のマス目に文字と句点を同居させて書く。）
- (4) 二重カギカッコ（『 』）は、書名あるいはカギカッコの中でカギカッコを用いる場合に使う。カギカッコは一般に、引用の場合に用いる。
- (5) 中線（——）には二マス分用いる。
- (6) 点線（……）は、一マスに三点ずつ打ち、二マス用いて表す。
- (7) 感嘆符（！）や疑問符（？）は、原則として用いない方がよい。（文章表現により、それぞれの意を表そう。）
- (8) 英字は横書きとし、原則として大文字アルファベットは一マス一字、小文字は二字まで入れる。また、英字使用は必要最低限にとどめよう。
- (9) 数字は、縦書き原稿用紙については、できたら漢数字を用いたい。横書きの場合は、一マスに二字まで入れる。

② 要約の場合

原稿用紙の使い方とは異なるので注意しよう。(設問中に指示があれば、それに従う。特にない場合には左記の通り。)

- (1) 冒頭一マス目から書き出す。(書き出しは一マス空けない。)
- (2) 行頭、行末を問わず、一マス一文字、一マス一記号(句読点やカッコ類)に徹する。
- (3) 三〇〇字程度までは改行(段落分け)は原則として不要。

③ 表現

- (1) 文末は特に指示のない限り、常体(だ、である調)に統一する。
- (2) 小論文では原則として、話し言葉的表現は避ける。従って、一人称も「ぼく、おれ」は避け、「私」を用いる。

④ 字数

- (1) 「……字以内」という場合

超過はもちろん厳禁。最後の行まで使って書くことが望ましいが、蛇足的文を加え無理に引き延ばすと、かえって内容的に逆効果になる恐れがある。論末の空白が目立たない程度を目安とし、少なくとも要求字数の九割以上は書こう。

- (2) 「……字以上……字以内」という場合

下限と上限の範囲内ならば可であるが、上限付近まで書くのが望ましい。

- (3) 「約……字」「……字前後」という場合

示されている字数から五〇字前後を目安とするとよい。

⑤ その他の注意点

(1) 題名について

設問中に題名を記すような指示がある場合はそれに従うが、一般的には題名を示す必要はない。(一行目から論述に入ってよい。)

(2) 推敲の場所について

誤字や直したい表現、内容については、できるだけ消して書き直そう。ただ時間的に、どうしても無理な場合には、マス目横の空白(推敲欄)を使う。この場合、推敲後に字数オーバーとならぬよう、十分気を付けよう。

(3) 漢字の使用について

誤字は絶対に避けるべきだが、かといって小学校で習うような易しい漢字の仮名書きは、論述全体の印象を低める恐れがあるので要注意。日頃から辞書を引いて、曖昧な漢字を正確に書けるようにしておこう。

(4) 文字の書き方について

読んでもらえる文字を書こう。正確かつ丁寧な文字を心がけてほしい。できれば略字は避けた方がよい。